

国産豚毛

家畜は人間が野生の動物を捕えて飼馴し、改良したものであつて、人類がそういう家畜をもつようになったのはおよそ一万年以前だといわれている。

我が国に於ける養豚事業は千数百年の昔、野生の猪を飼い馴らして食用に供して居つた時代があり、しかも是れを職業として数十頭も飼つて居た者もあつたので、猪飼という苗字もあり、猪飼野の地名もある。

(播磨風土記)に

猪養野 右猪飼と号くるは、難波の高津の宮に御宇しめしし天皇のみ世、日向の肥人、朝戸君、天照大神の坐せる舟の於に猪を持ち参来て、進りき、飼ふべき所を、求き申し仰ぎき
仍りて、此処を賜はりて、猪を放ち飼ひき。故、猪飼野という。

(十六代仁徳天皇の世、約千五百六十年前)

とあり。

また

(古事記)にも

我者山代之猪飼也・・・

ともある。

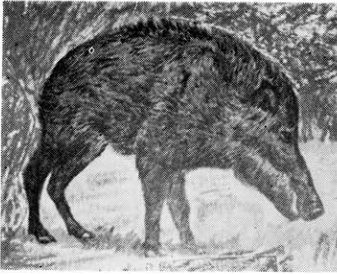
然しその後仏教の伝来(一三二二)と、これが普及された事によつて肉食の風習が禁止され(世界年表)にも第四十代天武天皇「弘文三年四月」牛馬鶏犬猿を食するを禁ずとあり(約千二百七十年前)この養豚?業が全く跡を絶つたのである。

猪の毛はブラシ業者が材料とするので支那、朝鮮から輸入されておるが、我国では本州、淡路島、四国、九州にだけ産し中部本州以南、淡路島、九州には最も多く、東北地方は殆ど絶滅に近い。古い統計なれど昭和八年度に於ける各府県の野猪捕獲数を示せば左の如し、

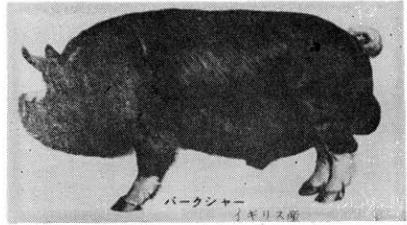
宮崎県	二八二〇頭
和歌山県	二三五七〃
三重県	二三二四〃
兵庫県	一八一九〃
高知県	一七八九〃
京都府	一六四五〃
大分県	九六四〃
岐阜県	八四四〃
鹿児島県	七八六〃
静岡県	七〇九〃
奈良県	六八七〃
滋賀県	五二二〃
熊本県	四九九〃
山口県	四六七〃

徳島県	四五四〃
愛知県	二七八〃
大阪府	二五四〃
山梨県	一〇九〃
福井県	八四〃
神奈川県	二六〃

右の表にあるように日本では関東以南の本州、四国、九州などに多く北海道にはいない。昼は休息して夜になると活動しはじめる夜行性動物である、食物は木の根、カシの実、カエル、カニ、へびまで食う。人間の目が夜みえないことを知っていて、ときには人里に現われ畑の作物を食い荒す。平素は人に危害を加えるようなこととはないが手負いになると人に向つて文字通り猪突首進み目もふらず、すさまじい勢いで突進、キバにかけかみつく。昔の武士が鎧兜で戦場に出る時「首を猪首に着こなし」ともあり、ひたむきに前進する時の着こなしである。また猪武者の言葉もあり猪の首は小廻りがきかないので方向転換が苦手なのであろう。警戒心の強い動物で寢屋は上手に作るが人間に気づかれるのを恐れて二日と同じところに寝ない。畑でエサをあさる時も子供を先に偵察に出し安全を確かめてから堂々と出ていく。子供に対する愛情もないと言われている。体毛は黒褐色で硬く首から背にかけての長毛はおこると立てるので「いかり毛」と呼ばれており、長いものは百五十%以上にも及ぶものがあり毛根のついているものを靴の皮革を縫い付ける時、毛針に使う。この毛針は最終値段が一本いくらのためにもなる高価なものである。猪の毛は顕微鏡でみても無いのかと思う程ズイの穴が極めて小さく、



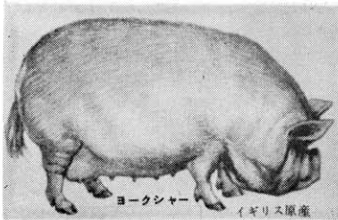
いのしし



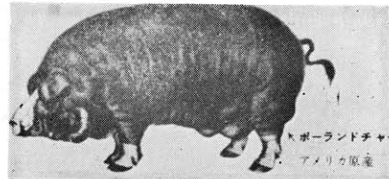
パークシャー (イギリス産)



ハンプシャー (アメリカ原産)



ヨークシャー (イギリス原産)



ポーランドチャイナ (アメリカ原産)



京都護王神社のいのしし列行



豚

毛先の割れ込みが深く、いくつにも割れていて動物の毛の中では最も硬毛である。

宝永（二百五十年前頃）時代以来、外国との貿易を許された支那人やオランダ人などの居留地が長崎にあつて、この支那人やオランダ人が豚肉を嗜好したため、その需要に応じて養豚が行われたもので、この豚は初め外国から入つたもので、前述の千数百年前、飼馴らしたものと全く系統が異なるものではあるが、豚が猪の改良されたものにまちがいはないが、その改良の方法によつて色々になるようである。

（博物誌）によればニューギニアで飼われているものは今でも半猪半豚であるという。

日本人の肉食の普及は、九州方面から始められたものようだ。維新前でも江戸での肉食も絶無ではなかつたが菓餌の一種として愛用された。それは牛馬よりも猪、鹿、兎、かわうそ、熊、かもしかなどから民間では、犬、特に赤犬を喰べたので、四谷の甲州屋、向島、両国の豊田屋、港屋、日本橋四日市の上すいなどが有名な猪屋「ももんじや」で大名行列などがその前を通るときは、駕かきが、わざわざ駕を肩からはずして、両手で差上げて通つたという。これは穢らわしいからという意味であつた。

このももんじやが麩町平河町にもあり、これを食べる時は体が温まるとか、強精剤という理由の場合だけ一種の薬として食べたので獣肉を食べることを、くすり食いと呼んでいた。

約束し女房の留守に麩町

というのは、女房の留守中浮気をする約束した男が強精のため獣肉食いをすることを詠んだものである。

一世の酒客頼山陽は猪肉が好きで、更に彼は鹿児島に旅行して豚肉も食べたようであり、当時（文政元年）の詩に（豚肉竹筍旅飯醒）とあり、その上、彼は天保元年一月に薩摩から牛肉をもらつて食べた記録がある。薩摩

地方には一部牛豚など肉食の風習が維新前から事実あつたといわれている。

麴町芝の屋敷へみんなうれ

とは、芝、三田、今のさつまつばらにあつた九州薩摩の島津家の下屋敷のことで、薩摩地方は悪食（その頃獣類を食するを悪食といつた）で知られていた。

肉食の風習が禁止されたのも仏教のためであるが、僧侶が必ずしもこれ等の戒律を守っていたかどうか疑わしい。酒も肴もお寺のみに通用する特別な名称があつた。仏教では、一度女をみれば三悪道におちいり、永い間、三途の業に迷うのである。いわんやこれを犯せば無限地獄に墮つという思想と戒律が支配していたが親鸞はこの思想と戒律とをぶち破つて健仁元年関白九条道実の娘と結婚したが、これは僧侶も人間である事を示したものであろう。

明治五年になつてやつと僧侶の肉食妻帯がみとめられるようになったのであり、明治天皇が大久保利通にすめられて、はじめて牛肉を食べられたのも明治五年一月二十五日である。

「すき焼」の語源が、鍋釜を使つて、その穢れることをおそれ、鋤の金具の部分をはづして、火にかけ、味噌たれをつけて、獣肉を焼いて食べたことから起つたといわれるほど、四足獣を食べる事が忌まれていたが、しかし一方洋学の流行から蘭学書生などは、牛肉を平気で食べたようでもあり、明治二年の「協救社術義」によると「わが国四足のを食すること、二十年前（嘉永年間）までは、東京大阪など、多くは橋際にて葷簞を張り、床几を出し、下々の輩のみ食せしが近来は一町の間に一軒あり、場所によりては檐を連る所もあり」と書かれている。

ペリーの黒船がきたとき、彼らは鶏と牛がほしいといつた。日本の役人は「船で牛を飼うこともできないで、あろうに何にするか」と聞くと「食うためだ」との答えに驚いて「牛は百姓を助けるもの、それを食べるとは残酷な事だ」とことわつたという。

猪を食料に供せられる事は現代も行われており（山くぢら）の名称で呼ばれて嗜好を満たしているが、江戸時代の庶民はしやれを好み自己が粹人とか通人なる事に誇りを感じていたもののように、明るい軽快な諷刺や諧謔などに興味をもち、当時の料理屋の看板に（牡丹）や、（紅葉）の絵をかって（牡丹）は猪（紅葉）は鹿の料理を示したもので、かような判じもののような事がちやんと理解されたものという。

（麻布）といつて「気が知れぬ」「木がない」と解釈するのがある。江戸に麻布六本木という地名はあるが六本の木がない、これを木を氣にかけて気が知れない、気がないと意であるが、また麻布六本木は近くに赤坂があり、青山があり、目黒があり、白金台があり五色のうち四色あつて黄（氣）がないというのである。

もつとも馬の肉は今も（桜）の名称で扱われているが、かなりむづかしいものもあつたようで、そのなかでも難解であつたろうと思われる隠語を、筆に用いる毛の動物に縁があるので余談をひとつ。

江戸時代、芝の愛宕山は江戸で一番高く眺望も開けて、洲崎、金杉、品川の海を一望に、更に安房上総の山々をのぞみ、殊に花どきなどには、ここに遊ぶものが非常に多かつた。

この人出に目をつけた茶店の亭主の商魂で遠目鏡（望遠鏡）を備え、これを賃貸しようとし、遠目がねの看板を作り、この看板を誰に書いて貰おうかと思案のところへ、飄然と曙山人の逍遙するのを見つけた茶店の亭主は、曙山人に、遠目がねの看板の揮毫を頼んだ。

曙山人心得て、くだんの看板に筆太に、ひらがなの(う)の字を書いて、さつさと帰つて行つた。

茶室の亭主は不可解ながらも、時の有名人の書いたもの故、この看板を掲げておいたが、幾日たつても遠目がねを借りに来るものは一人もない、ところがある日、一人の老人がこの看板をしげじげとながめていたが

ウムこれは(とうめがね)だ

とひとりごとを言つた。茶店の亭主はよろこんで飛び出して来て、老人の手を取り、しようぎに招じお茶を進ぜ、老人にむかい

この看板は曙山人の書いたものであるが、今迄これを遠目がねと読ん人はない、あなたが始めてだが、どうしてこれをとうめがねと読むのか

との問ひに老人は

これはとうめがねだ

という、茶店の亭主ふにおちず

どういう訳でとうめがねなのか

と重ねての問ひに老人は

書いてある字が(う)であるから

と指を折つてかぞえながら

う・たつ・み・うま・ひつじ・さる・とり・いぬ・ゐ・とこれで九つのこだから十目とらめがねだ

ときかされ、茶店の亭主、あいた口がふさがらなかつたという。

昔の十円札に和氣清麻呂といのししが印刷されていて、当時十円札を俗にいのししと呼んでいて、これ一枚あれば豪遊出来たもので今の一万円よりも使い出があつた。

和氣清麻呂と猪との因縁は、清麻呂が道鏡のために大隅に流され、途中で亡きものにされようとした時、多くの猪があらわれて清麻呂を守つたというのである。

京都の護王神社は道鏡が皇位をねらつた時、これを排撃して皇位を護持した忠臣として清麻呂を祭つたので、その拜殿の前に猪が飾られているのもこの故事によるのであり毎年四月四日猪行列が行われる。

猪ししを食つた報むかい、の言葉は古くからあるが、これは猪は美味なれど食すれば病気になるという俗説で、それより女色にふけて梅毒にかかることを譬えて云う言葉である。

明治維新後あらゆる方面に欧米の産業が模倣され、豚も英、米から各種輸入された。日本に飼われて居る豚の数は戦前（昭和十年）には百六万三千頭も飼われていた事があるのであるが昭和二十八年度の統計によると九十九万四千頭となつてゐる。

日本に飼われている豚の種類は我々がよく見る白い豚はヨークシャリアと云い、黒い豚はバークシャリアといふ。

ヨークシャリアには大中少三種類あつて原産地は英国本土（ヨーク州とソマルン州）の土産豚に中華豚などを交雑して固定させたものであつて、これは英国本土の土産豚の良質な肉質と中華豚の頑健な質とを兼備している。

バークシャリアの原産地は英国のバーク州であり英国の土産豚に中華豚とイタリヤ産ネアポリタンを交雑して

固定したものの。六白と云い顔面、下腹と尾の先端が白毛である事が特徴である。

その外タムウオース、チュスターホワイト、デューロク、シャーシ、ポランドチャイナ、中華豚などがあ
る。

我が国における養豚は国内全土にわたつて行われているが豚そのものが肉質量に重点を置いて固定した豚質である上に、これを更に向上させるべく各地で飼料其他の研究がなされて居る。で静岡県のように静岡県の如きは製粉精白残渣を飼料の主体とし水産物加工残渣等も利用され、その発育も肉質も良好で、最盛期一日五百匁の体重増加が記録されていると言はれているがこの肉質の向上はその毛質の低下を意味する事は支那豚毛の欄で述べた事と同一である。その上に舎育飼であるため毛質は至つて細く且つ軟質であり支那大陸の如く幾種類かの特長を持つた毛を産出されるという事がない。それでも産地により繊維の硬軟、弾力性の強弱、繊維の太細等はあるのであるが別の名称で呼ぶ程のものがなく、日本豚毛は概して一種類と見做されている。従つて其の毛の利用面もやや限定されている。

日本産豚毛も豚体の部分によつて長短硬軟の差があり、また屠殺の時期によつて採集される毛質に良、悪の差のある事は北支豚毛の（原毛採集期）に述べたものとはほぼ一致して居り、屠殺及び毛の採集方法は、支那豚毛における場合と大差がない。

国内で産出される豚毛は（地豚）と呼ばれて居り、その寸法サイズは号数で呼ばれ左の如き寸法に区分されている。

名称は一号から十号迄あり、其の寸法は

一号	二号	三号
四号	五号	六号
七号	八号	九号
十号		
4''3¼''2½''1¾''	3½''2¾''2''	3¾''3''2¼''

となつてゐる

黒豚毛及び白豚毛の採集される割合は

黒豚毛が白豚毛の約¼程度

であるが白豚毛の大半は黒に染毛して黒毛として使用されている。

黒豚毛及び白豚毛の用途

黒豚毛 各種刷毛、各種木ブラシ工業用ブラシ 其他

白豚毛 各種歯ブラシ、各種木ブラシ、爪ブラシ各種刷毛、筆 其他

なお、白豚毛、黒豚毛共、少量ながら筆の心毛に利用されており裾物は椅子のクッション其他の詰物にも利用されている

以上

第二次大戦後、休戦条約締結国とは自由に貿易を行う事が出来、さらに大戦中より中国豚毛が枯渇しておつたため、各国から豚毛が輸入されているが、いづれも支那豚毛に比べて著しい遜色があるものであり、結論として中国豚毛が地域も広汎にわたり、産地によつて各種各様のものを得られる点からも、最優秀という事が出来る。

中国豚毛はその長短硬軟に応じ、あらゆるブラシに用いられているのであるが、朝鮮豚毛は満洲豚毛と共に、塗装用刷毛に使用する場合は支那豚毛を凌ぐ優秀なもので豚毛を述ぶる場合において特筆大書すべきものである。

しかしこれも他の毛類同様、満洲豚毛と朝鮮豚毛との識別は、やはり多年の経験による判別力による以外方法がないと思われる。豚毛は他の毛に比べて剛直にして弾力性に富み磨滅の度合も極めて強靱であり、これが豚毛の特長である。これは毛には必ず其の中心にずい（穴）があるのであるが猪と豚の毛に限り、このずいが無いに等しい程度のものである。（顕微鏡による各種獣毛のずいの比較。（ブラシ欄参照））

豚毛はブラシ原料とする場合、毛先の割込の少ないものを良質とする事が常識であり、この点、重慶豚毛の如きは最も優秀とされているが、用途によつてはそうでない場合がある。

たとえば木目刷毛の場合五吋以上の豚毛を使用するのであるが、毛先の割込みが割込に深く、しかも割込みの状態も枝から枝が生え、割込の数の多い露毛（ソ連毛）に遠く及ばぬのであつて、硬毛必ずしも万般に適すとは云ひ得ず、各種各様の豚毛は製作ブラシの用途に応じ慎重に選定せらるべきものである。

豚毛はその用途によつて、毛先の調子を生命として使う場合と、毛先には一向関係なく、根元の部分の剛さを生命として使う場合とがある。

豚毛は毛を利用される動物のうち猪の毛に次ぐ剛毛で、ブラシに硬毛の必要のある時に利用される場合が多いが、長さが限定されているのでその根元の方は最も大切な部分であり、頭髪用ブラシや牛馬手入用ブラシ（毛櫛）などの上等品にこの豚毛の根（毛根）を利用して作られる場合がある。ただし、この毛根の大小は毛の剛さ

と比例していない。

昔中国に「遼東の豕」（豚の仔）の言葉があつて、たとえにつかわれていることからみて、昔遼東に白豚はめづらしかつたものであろうか。

後漢の世祖光武帝が位につき洛陽に都して間もなく、天下は未だ戦火の余燼消えやらず、各地に帝位をうかがう者が割拠していた。

大將軍・幽州（奉天の西北の地方）の牧（長官）朱浮は、諸郡の多くの穀倉を開放して賢士を集め、これをうるおそうとしたことがある。時に漁陽（北京以北・天津以東の地）の太守をしていた彭寵は「天下が未だ安定せず、軍食として保持するため」という理由で、みだりに穀倉を開くことを禁じた。事實は光武帝を輔けた功に奢つて足ることを知らない寵は、ひそかに自立して乱に及ぼうとしていたのである。浮は禁令に大いに不満を抱き、この指令を受けず、かえつて寵の不穩な動静を洛陽に報告した。これが寵の知るところとなり大いに怒りを発した寵は、兵を挙げて浮を伐とうとしたので、浮は一文を草して書を送り、寵の非を責めた、

「貴下は郡守の地位にあつて、ただに軍食を惜しんでいるが、私は朝敵討滅の任にあるゆえ賢士を必要としてゐる。これはまさに国家の事である。私が貴下を讒言したと疑うならば、自身、天子の許に赴いて奏上されるがよろしい、貴下が耿況（上谷太守）とともに天子を輔けて、同じく国恩を受けているのに、貴下だけ誇つて、その功天下に高しと思つていられるのか、貴下はこういう話しを御存じか、

「昔、遼東（奉天の東南・遼河の東）に白頭の豚の仔が生れたので、これは変つた豚だ、今迄に見た事が無い、めづらしい事だと、これを王に献じようとする者があつたが、江東まで行くと、その地の豚はどれもこ

れも皆白かつたので、おのれの僻見を悟り大いに慙じて帰つた」という

「もし貴下の功績を、朝堂において論ずれば、劣らず功高い群臣の中で、貴下はまつたく、この遼東の豕（豚）の仔にすぎないことを知るであらう」

そしてさらに天子に叛をする愚をいましめて

「今天下幾里ぞ、列郡幾城ぞ、奈如ぞ、区々の漁陽を以て怨を天子に結ばんや」

と言つている。しかし、奢り高ぶつた寵は、自ら燕王を称して天子に叛き二年のちに伐たれてやんだ。

「遼東の豕」は彭寵のごとく、他から見れば異とするに足らない功を誇る、或いは、他から見れば当り前のことを自ら奇異だと誇る、という意味にあたる。

昭和二十二年十月六日北海道旭川市で豚競走がおこなわれた。その日、駅前広場のスタートラインに勢ぞろいした道内じまんの豚三十頭が十頭づつ三班にわかれて号砲一発七百メートルをはしつたが、斜に走るものや途中から逆もどりしたのもあつたが、一番はやかつたのは五分三十秒であつた。